

# ようさん 養蚕と製糸工場

## 養蚕業の拡大

昆虫である蚕を桑の葉によって飼育し、生糸の原料となる繭を得る養蚕は、明治時代頃から市内の農家で盛んに行なわれるようになりました。

日本での養蚕の歴史は古く、4〜5世紀に大陸からやってきた渡来人によって養蚕と絹織の技術が伝えられたと考えられています。ただ、国内での養蚕・製糸技術の水準はそれほど高いものではなかったため、生産量も少なく、



蚕に繭をつくらせる族(まぶし)

京の西陣などで作られる高級織物の原料には、中国産の白糸が用いられることが多かったといえます。

そのような中、江戸時代後期になると、諸藩が財政難に対応するために養蚕を奨励し始めたこと、さらに幕末の開港による生糸輸出が始まったことなどにより、養蚕業は急速に拡大を見せるようになりました。

## 高島市内での養蚕業

『高島郡誌』によると、市内では明治時代中頃から、桑園の改良発達と共に高島郡農会による生糸生産の推奨が進み、また、各町村に技術員を置いて、蚕の飼育指導等にあたったことから、次第に多くの農家が養蚕に関わっていきうになりました。当時、特に養蚕が盛んだったのは西庄村・百瀬村(マキノ町)、川上村(今津町)、本庄村(安曇川町)で、これらの地域では、当初は家ごとの個人産業として生糸の生産が行なわれて

いました。その後、製造場組織として、個人の出資による製糸工場がマキノ町海津と勝野の2箇所に設立されました。

## 海津製糸工場の盛衰

このうちマキノ町海津に造られた製糸場は、明治23年に海津の磯野源治郎が、海津字西内の現在のマキノ東小学校敷地を買収して、新設したものです。50台の釜を備えて、同年8月に開業しました。原料の繭は、主に地元高島産のものが使われましたが、一部は坂田郡や伊香郡からも購入していました。また、従業員は、若狭出身の女性が多く、地元出身者や湖東出身者を加えると、最盛期には53人のぼったといえます。

海津製糸場で生産された糸は、ほとんどが海外へ向けて船便で輸出され、一部は仲買人によって、長浜方面へ売却されていました。しかし、明治40年以降、国内での生糸の価格は下降の一途をたどり、大正元年、経営困難のため海



津製糸工場は廃止されるに至りました。

閩文化財課

☎ (32) 4467

## 編集 雑感

今年の市内の花火はどこから観ましたか？ 8月上旬に今津・マキノ・高島の3か所の会場で花火が打ち上げられました！

昨年は、会場内での撮影でしたが、今年は遠方からの撮影にチャレンジしました。近くで撮るのは違う難しさがあり、とても苦戦しました。

しかし、自分の好みは、近くで見上げて花火の迫力を肌で感じながらの撮影だと気づくことができました。来年は近くで、これまでに見たことのないような花火を撮影してみたいと思います！ (Y)



広報たかしま

平成30年

9

月号

No.224

発行▼高島市

編集▼政策部企画広報課

〒243-0292 滋賀県高島市新旭町北畑5の5番地

☎ 0740(25) 8000(代)

http://www.city.takashima.lg.jp  
t:info@city.takashima.lg.jp